2020/9/21-2

(うとQ世話し 想像するに余りある)

「想像するに余りある」

相手の苦悩、苦境、苦渋、困難、悲痛な状況や立場、身の上。

この「想像するに余りある」の「想像力」が欠けていた場合、どうなるか？

例えば、「想像力という能力」ではなく、想像するだけの「経験数、経験幅」を持っていない、想像する元となる「周囲への観察の蓄積」がない、想像力を働かせる前に常にそれに先んじて「正解や対処ノウハウ」を与えられてばかりいる。例えばマニュアル。

なんか4行目以降の部分は、何処かでよく見る風景ではないでしょうか。

経験数や幅については、過度の安全安心指向から「危ないことや冒険」はその安全が100%保証されない限りさせないとか、周囲への無関心や視界の狭さは「歩きスマホ」のことを指している様にも見えますし、最後の一例は「時間制限内」という縛りから、自分なりに或いは深く考える時間をまず省いていきなり解き方や効率的な覚え方をすぐさま伝授する学校や会社研修の姿に見えませんか？

これでは、相手を思いやり、慮って（おもんばかって）、その苦悩、苦境、苦渋、困難、悲痛な状況や立場、身の上をわが身の事として受け止め、それをその時に「自分の想像力で想像してみようと最大限努力しても」それに及ばず、ついには

「想像するに余りある」

と言わしめるような若い人を育成することなど、言動（理念）と実際（社会システム、風潮）が正反対の様な今、出来ようはずもないと思うのですが。

どうなのでしょう。

若い人は混乱するばかりだと思います。

それこそ若い人の混乱は「想像するに余り」あります。